

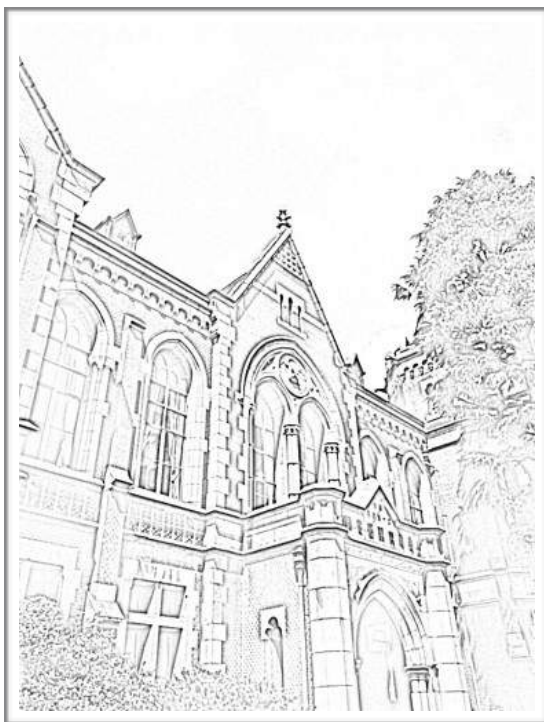
History of Educational Thought Society

教育思想史学会

第25回大会プログラム

2015. 9. 12 (sat) ~ 2015. 9. 13 (sun)

慶應義塾大学 三田キャンパス



主催：教育思想史学会 共催：三田哲学会

大会参加費

| | 一般 | 学生・非常勤 |
|-----|--------|------------|
| 会員 | ¥3,500 | 会員 ¥2,000 |
| 非会員 | ¥4,000 | 非会員 ¥2,500 |

懇親会費

| | 一般 | 学生・非常勤 |
|--|--------|--------|
| | ¥5,000 | ¥3,000 |

キャンパス地図・お食事処案内



- 正門から入って階段を上り、左手奥の西校舎(⑫の建物)が大会会場です。階段を上って2階に受付および会場がございます。
- 第1日には学内下記食堂および売店が営業予定です。
 - ・山食：西校舎(⑫の建物) 1階北側
営業時間10:30~14:00
 - ・生協食堂：西校舎(⑫の建物) 地下1階北側
営業時間11:00~14:00
 - ・ファカルティクラブ：北館(①の建物) 1階奥
営業時間11:00~14:00
 - ・生協購買部：西校舎内の階段を下り切って正面右手(⑭の建物)
営業時間11:00~14:00
- 二日目は学内食堂が休業のため、あらかじめお食事をご用意いただくか、学外の飲食店をご利用いただきますよう、お願い申し上げます。
- 二日目は正門以外の門が閉鎖されます。ご注意ください。

大会日程

2015. 9. 11 (Fri) 大会前日

17: 30 ~ 18: 30 第IX期 理事会
(南館 5階: D2051室 (ディスカッションルーム (会議室))

2015. 9. 12 (sat) 一日目

9: 00 ~ 受付 (西校舎 2階)

9: 30 ~ 12: 30 Symposium 1 (527教室)

戦後教育史と近代教育学批判

12: 45 ~ 13: 45 第VIII期・第IX期 理事会・編集委員会合同会議 (522教室)

14: 00 ~ 15: 45 Forum 1 (527教室)

20世紀初頭のプロジェクト論カリキュラムの開発とその普及

——C.A.マクマリーによるタイプ・スタディの普及を手がかりに——

16: 00 ~ 17: 45 Forum 2 (527教室)

認識の外部を語ることの教育学的意味

——シュタイナーにおける<神話>思想とそれを支える「教育」観から——

18: 00 ~ 20: 00 懇親会 (ザ・カフェテリア: 南校舎 4階西側)

2015. 9. 13 (sun) 二日目

9: 00 ~ 受付 (西校舎 2階)

9: 30 ~ 12: 00

Colloquium 1 (522教室) 教育思想史の「裏面」を問う

——「古典」はどう読まれてこなかったのか——

Colloquium 2 (525A教室) 経験を語ることの不/可能性

——1920-30年代における新たなる経験の模索——

Colloquium 3 (525B教室) 生の語りと人間形成

13: 00 ~ 13: 45 総会 (527教室)

14: 00 ~ 17: 00 Symposium 2 (527教室)

フェミニズムとジェンダー論は教育学に何をもたらしたか?

——思想史の中間総括——

大会本部・・・523A教室 会員控え室・・・523B教室

一日目 2015. 9. 12 (sat)

Symposium 1 9: 30 ~ 12: 30 527教室

戦後教育史と近代教育学批判

報告：青柳 宏幸（山梨学院短期大学）
木村 元（一橋大学）
室井 麗子（岩手大学）

司会：小玉 重夫（東京大学）

戦後70年となる本年、戦後史に関する議論があらためて活況を呈しているように思われる。戦後教育史をめぐる認識枠組みについても、再検証の動きが見られる。たとえば日本教育学会では、特別課題研究「戦後教育学の遺産の記録」が行われ、シンポジウムや報告書が公開されている。そのなかでは、たとえばイデオロギーの対立の中にあつたといわれる戦後の教育においてイデオロギーそのものが空洞化し、欧米において顕著であつた1970年前後の教育の権力性や教育に内在する政治性への着眼が、必ずしも大きな動きにはならなかつたことなどが、当事者の証言としても明らかにされつつある。

だがひるがえって本学会の前身である近代教育思想史研究会の設立（1991年）の経緯に思いをはせれば、そこに示されていたのは、1970年前後に一端は挫折したかに見えた教育の権力性や教育に内在する政治性への着眼を、あらためて理論的な俎上にのせようという意欲であつたのではないだろうか。それは、「近代教育学批判という思想運動」として、以下のように述べられている。

「この試みのねらいは、今日の教育思考の歴史的構造を明らかにする意図で、その原因と仮にみなすべき近代教育学を総点検しようとするものです。その意味から言えば、近代教育学を現代に生かそうとするよりも、現代の教育を創った責任をそこに問う仕事になるでしょうし、さらには、この仕事を近代教育学批判という思想運動であると表現することもできるかもしれません。」（「近代教育思想史研究会」へのお誘い（設立趣意書）1991年6月27日より）

だが、この「近代教育学批判という思想運動」という考え方は、本学会において継承、あるいは検証されているかといえば、それは必ずしも十分に行われているとは言いがたいのではないか。それどころか、この「近代教育学批判」というそれ自体すぐれて政治的なニュアンスを含む方向性に対しては、世代によって、あるいはよってたつ研究関心によって、会員の間はかなり異なる距離感というか、スタンスが見られるように思われる。たとえばルソーやマルクス、あるいはデューイ、フーコー、アレント、ハイデガーらのテキストをどのようなコンテキストにおいて読み解くのかという点に、この近代教育学批判との距離感は如実に表れているのかもしれない。

本シンポジウムでは、かかる関心から、戦後教育史の中にあらためて「近代教育学批判という思想運動」を位置づけ直し、同時にそことの距離感を、スタンスと研究領域を異にする論者の間でつきあわせつつ、議論を深めていきたい。

20世紀初頭のプロジェクト論カリキュラムの開発とその普及
——C.A.マクマリーによるタイプ・スタディの普及を手がかりに——

報告：藤本 和久（慶應義塾大学）

司会：橋本 美保（東京学芸大学）

米国ヘルバルト主義教育運動は1905年ごろには終焉したというのが米国教育史家の一般的な見方である。だが、C.A.マクマリーが教員養成・教師教育機関にて精力的に理論修正と現場への提言・指導を続けていたことはあまり注目されてはいない。彼は「タイプ・スタディ」論に焦点を移し発展させた。1910年代はイリノイ州にて、1920年代はテネシー州にて、附属学校や現地公立学校、教育委員会と連携しながらタイプ・スタディを実践化し、その成果を核として〈「プロジェクト」による教授〉を唱えるに至った。1918年のキルパトリックのプロジェクト法以前に自覚されていたプロジェクト（論）については農業教育等の系譜が明らかにされつつある。だが、マクマリーのそれは一貫してカリキュラム編成にかかわる問題として認識され、公的なコース・オブ・スタディの中でのプロジェクト（論）として創り上げられたことは注目に値する。また、それゆえに一般の学校にも影響を及ぼしたといえるだろう。

フォーラムにおいては、マクマリーのタイプ・スタディを中心にすえて、地方教育当局や教師たちがそれをどのように受容し価値づけていたかについて、地方教育誌（紙）や実践家の遺した一次史料などをもとに整理して報告する。本報告が、カリキュラム開発史において、教授理論家が実践に影響を及ぼすということの実態と歴史的意味を問う一つのモデルケースとなることを期待している。

認識の外部を語ることの教育学的意味

—シュタイナーにおける〈神話〉思想とそれを支える「教育」観から—

報告：河野 桃子（信州大学）

司会：井藤 元（東京理科大学）

近年、新教育思想に含まれる非合理的なものに関する語りについて、多くの蓄積がなされてきている。通常、新教育運動の一つに分類されるシュタイナーの教育思想は、こうした語りがとくに顕著に現れている例だろう。シュタイナーの思想は、後期に入って神秘主義的傾向を帯びるようになったことが知られており、そこに見られる具象性をもった叙述が、批判的・理論的考察の対象になりにくいとの困難が指摘されてきた。こうした後期シュタイナーの叙述スタイルは、同時代から現代に至るまで、批判的な意味を込めてしばしば「神話」と形容される。

このような評価は、神話と学的ロゴスの間に明確な線引きをし、その分離を固定したものとする視点からなされている。しかしシュタイナーは、自らの後期思想をロゴスの側に位置づけた一方で、ミュトスの側にもまた積極的に位置づけようとしていた。本報告では、シュタイナーが「新しい〈神話〉」として後期思想を構想したこと、また、それによって成し遂げようとした「教育」について、前期思想、および19世紀・20世紀の神話論との関連から思想史的に明らかにしていく。この作業を踏まえた上で、〈神話〉形式によって認識の外部を語ることが実際の教育関係に何をもたらしているのか、考察を行いたい。

教育思想史の「裏面」を問う

—「古典」はどう読まれてこなかったのか—

企画者：相馬 伸一（広島修道大学）
下司 晶（日本大学）

報告者：相馬 伸一（広島修道大学）
室井 麗子（岩手大学）
小山 裕樹（摂南大学）
生澤 繁樹（上越教育大学）

司会者：下司 晶

近年、「教育学の古典」がどのように形成され、どのように読まれてきたのかを問う研究が出てきている。それらは従来の本質主義的なテキスト読解を問い直し、「古典」は各時代において(再)創出されてきたものとする。「古典」は、各時代の問題意識に応じて光を当てられることで、時代を逆照射する鏡として機能してきたのである。

本コロキウムでは、そうした動向を受けて、教育思想が「どのようには読まれてこなかったのか」を問い直したい。現在「教育思想」とされているものは、ある思想家の広範な思索から、教育や人間形成に関する面だけを抽出したものである。そのため、実際には教育に関する言明と一続きであり、むしろ教育を成立させるものであるはずの、社会思想や宗教的背景などを十分に考慮してこなかった。

ではこのように教育思想史の「裏面」を問うならば、教育思想史にどのような新しい視野が開かれるのか。

コメニウス、ルソー、ヘルバルト、デューイといった「教育学の古典」に、これまで光を当ててこられなかった「裏面」からアプローチすることで、教育思想史のありようを問い直してみたい。

経験を語ることの不／可能性

—1920-30年代における新たな経験の模索—

企画者：田中 直美（お茶の水女子大学・院生）

報告者：辻 敦子（奈良女子大学）

神戸 和佳子（東京大学・院生）

司会者：丸山 恭司（広島大学）

田中 直美（お茶の水女子大学・院生）

指定討論者：森田 伸子（日本女子大学・名誉教授）

小野 文生（同志社大学）

19世紀の書物中心の観念的な教育に対し、とくに手工的活動を通して子供の知識と道徳性の統一的発達を旨とする労作教育の思想は、20世紀の科学技術の進歩の流れのなかで、J・デューイ等によって発展させられた。それと同時に、第一次世界大戦によって、経験の言語化の不可能性が意識されるようになり、これまでの経験の自明性の再検討が行われた。本コロキウムでは、経験の言語化の不可能性が唱えられたにもかかわらず、そのなかで新たな「経験」の語り方が模索された時代、すなわち1920-30年代に着目し、この時期に現れた三つの立場を検討したい。具体的には、「主体なき経験の語り」を問題にしたW.ベンヤミン（奈良女子大学・辻）、ヘーゲルの弁証法とは異なり「翻訳モデル」で経験をとらえたF.ローゼンツヴァイク（お茶の水女子大学院生・田中）、個人の生活や自己を見つめる「生活綴方」実践（東京大学院生・神戸）の三つの立場である。三者の「経験」をそれぞれ、その言語化という観点から読み解き、報告者と討論者、そして参加者皆様とともに、経験の言語化についての考察を深めてみたい。

生の語りと人間形成

企画者：藤井 佳世（横浜国立大学） 報告者： 藤井 佳世（横浜国立大学）
 野平 慎二（愛知教育大学） 野平 慎二（愛知教育大学）
 ローター・ヴィガー（ドルトムント工科大学）
 司会者：鳥光 美緒子（中央大学）

生きることのなかで日々遂行している行為を、私たちは人間形成の視点から、どのように描くことができるのか。人間形成の視点から、と述べることによって何が射程に入るのか。現代における、人間形成論の可能性はどこにあるのか。

こうした問いに答えるのが、「人間形成論に方向づけられたバイオグラフィ研究」である。「人間形成論に方向づけられたバイオグラフィ研究」は、人生を語るという行為のなかに、人間形成の出来事を捉える。なぜなら、人生を語るという行為には、自己と世界の関係や自己定義の変容などが現れるからである。それらは、主観的なものと客観的なものとの交差であり、人間形成のプロセスにともなう困難や葛藤の背景を明らかにする。

しかし、課題もある。語られた資料をどのように読むのか、読み解かれた後の議論はどのように進むのか。人間形成論はどのように修正されるのか。あらためて、経験的研究と人間形成論の架橋はいかにして可能か、が問われなければならない。本コロキウムでは、事実と規範の関係、解釈をめぐる複数の視点など、ナラティブ・インタビューにもとづく人間形成の解釈を試みる研究の可能性と課題について考えてみたい。

※二日目 (9/13) の昼食につきまして

二日目は学内食堂が休業のため、あらかじめお食事をご用意いただくか、学外の飲食店をご利用いただきますよう、お願い申し上げます。

また、二日目は正門以外の門が閉鎖されますので、ご注意ください。



フェミニズムとジェンダー論は教育学に何をもたらしたか？ —思想史的中間総括—

報告：奥野 佐矢子（神戸女学院大学）

小玉 亮子（お茶の水女子大学）

虎岩 朋加（敬和学園大学）

司会：西村 拓生（奈良女子大学）

かつて1980年代後半から90年代にかけて、近代教育思想史研究会が立ち上げられ、ポストモダニズムが隆盛だった時代は、フェミニズム理論がラディカルな展開を見せた時期でもありました。「第二波フェミニズム」の中で理論的に鍛えられてきたジェンダー論は、人文社会科学全般に対しても大きな思想的起爆力をもっているように感じられました。とりわけ教育や子育てや家族をめぐる諸問題に対して、ジェンダー論が提起していた議論は密接かつ切実に関わるはずのものでした。しかし、実際には日本の教育学におけるその受容は、ポストモダニズムの一環として「消費」された以外は、奇妙に鈍いものだったように思われます。

そして今日、「男女共同参画社会」が日常的な政策・行政の用語になりながら、私たちが直面しているのは、たとえば「女性人材の活用」というスローガンの下で女性が「男性と同じく」労働力として酷使されつつ、むしろ若年女性の貧困化が進行するような状況です。その一方で、かつてフェミニズムやジェンダー論がはらんでいた思想的可能性は、未だ十分に酌み取られないまま、見えにくくなっているようにも思われます。はたしてこれらの思想・理論が私たちにもたらしたもの／もたらし得なかったものは何でしょうか。私たちは、さしあたり教育学におけるその受容

を振り返って、きちんと思想史的に総括する必要があると考えます。

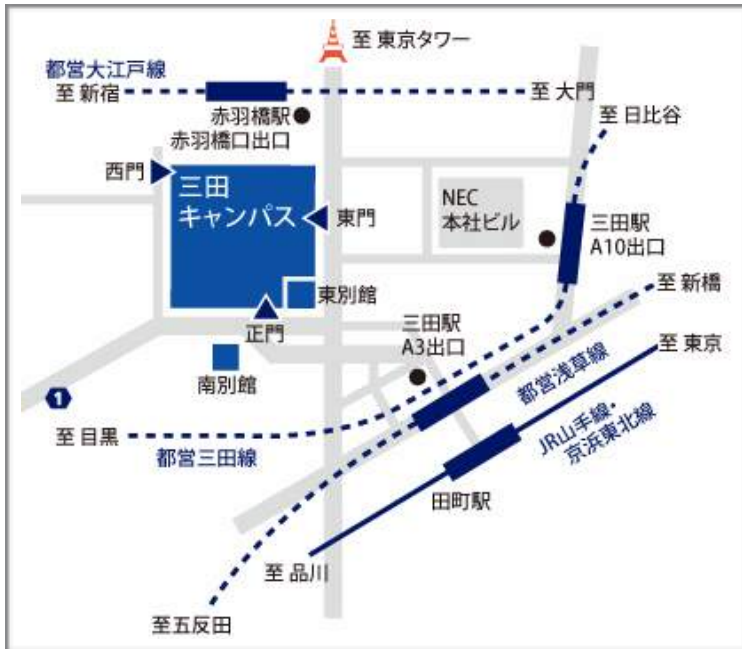
そこでこのシンポジウムでは、教育学研究者としてフェミニズムとジェンダー論に正面から向き合ってきた方々に、現在の状況認識を踏まえて、それぞれの視点から教育学におけるフェミニズムとジェンダー論の受容を振り返っていただき、そこから議論を展開したいと考えます。それは近過去の思想的営為を総括する試みですが、決してミネルヴァの梟としてではなく、これらの思想・理論がはらんでいたはずの可能性をもう一度賦活して受け取り直すための、いわば中間総括の試みです。



教育思想史学会 第25回大会 会場案内

慶應義塾大学 三田キャンパス
東京都港区三田2-15-45

アクセスマップ



三田キャンパスまでの交通機関

- ・ JR山手線/JR京浜東北線「田町」駅下車、徒歩8分
- ・ 都営地下鉄浅草線/都営地下鉄三田線「三田」駅下車、徒歩7分
- ・ 都営地下鉄大江戸線「赤羽橋」駅下車、徒歩8分

教育思想史学会事務局

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
慶應義塾大学文学部松浦良充付
事務局 E-Mail: office@hets.jp